

『子どもの世界をみる』

一心性画からの試みー

近 藤 伊津子

“The world of children”

what children tell in their “shinsei-ga” drawings

Itsuko KONDO

はじめに

「むかしむかし……」の呪文により誘われる薄暗がりのむかしの世界は、人類普遍の無意識の世界であるとするなら、その不可視のものと、日々のくらしの可視の世界との交流をなしうるものは、現代においては子どもである。

昔話は、無意識の心的過程を表現している¹⁾。

M²⁾は昔話をきくと画を描いた。その描画は自発的であり、昔話に対しては選択的である。

Mが昔話をきいて描画したものを心性画とするならば、それを手がかりとして、昔話が照射するMの内的世界をはの見る事が可能であるか、さらに、昔話から生み出されるものの衝撃によって、Mの内的世界の形なさないものが形どらされていくことで、外的世界に変容がもたらされたであろうか。

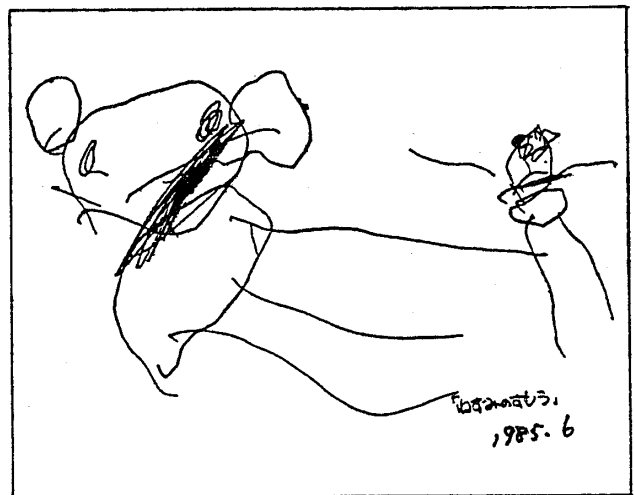
Mの心性画

Mは思いつくと手当たり次第の身近かな紙に一気に描き、さらには、その上になぐりがきを重ねていき鉛筆、クレヨンで元型を不明にしてしまう。これらの画は、そのように一通り描いたところをMの母がMから手渡されたものである。

描画1『ねずみのすもう』(1985.6)

この昔話は、Mの母が初めて憶えようとしたおはなしで、Mの身辺で繰返し話をした。

Mは「アシコンナニシテ、ノコッタノコッタシテル



描画1 (M・2歳8ヶ月)

ノ」といって描いた。

痩せた小さなネズミが肥った大きなネズミをみごとに倒した瞬間を描いた。

小さなネズミが大きなネズミに勝った、という驚きと喜びをMは描いた。

この昔話の主人公、小さなネズミはMにとって内的世界にある自らの姿なのである。

Mの母の記録によれば、Mは自分が二歳であるといいたくない。馴染みの隣人に自分は四歳と言ったという。「二歳はいやなのね」ときくと頷いた。もうすぐ三歳と答えるよう教えたら満足したという。

Mは父母と三人家族の中で、無力で小さな者として位置づけられ、あらゆる庇護を受けることを余儀なくされている。

この昔話は、貧しい爺婆が餅を搗いてネズミに喰わせるといふ美談が主題ではない。Mの描いた痩せた小さな

ネズミが、その小さい者のままで大きな者を負かしてしまふ、その事こそ主題である。

小さく無力な者が大きく力あるとされる者を負かす、つまり今、小さく無力とされる者こそ、実は最も可能性を潜ませている者であるという、今、小さく無力な者に希望を与え声援を送るメッセージでもあるのだ。しかし、もっと重要と思われることは、Mは、小さく無力の者として、位置づけられ、それは、やがて生活習慣、言葉の獲得などおとなの作ったその域に一刻も早く到達するのを追いこまれる、その過程の者としてのみ承認されている。

Mは小さく無力であり、未だ至らない者、負の存在としての承認のみ与えられている。

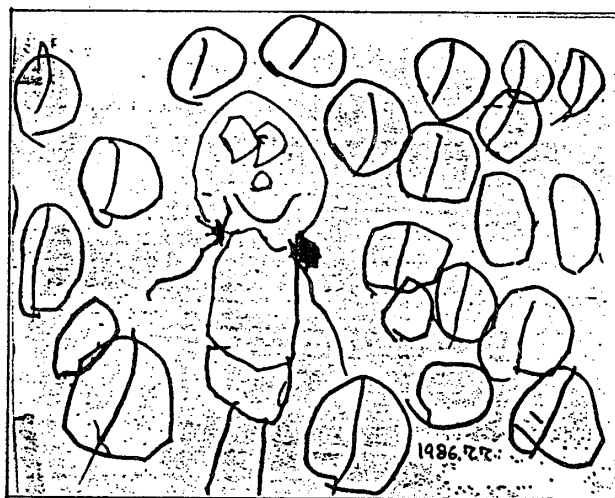
その理不尽さに立ち向うことも能わず、その流れに巻きこまれている。

つまり大きくなりたい、という願望もさることながら、Mの無意識の不安は、Mの小さく無力であることを恥じさせられていることである。「ハレバレと小さい者」でありたいのである。Mの小さく無力である、その自然性の正の存在としての承認がいとも不安であるのだ。

この昔話のネズミは餅を食べて、立派な体軀となり、肥ったネズミを倒したわけではない。あくまで小さい痩せたネズミとして、対決した。爺婆は痩せた小さなネズミのそのありようそのままを承認した。ありようのままを受入れられることで、小さなネズミは真の力を獲得したのである。

描画2『炭焼き太郎』(1986.7.7)

Mは絵本を読んでもらうのは生後二ヶ月以来、日常の生活にあるものとして定着して久しく、昔話を聴くこと



描画2 (M・3歳7ヶ月)

は毎週³⁾となっていた。

Mは画面一杯に散乱する桃、そのおびたしい桃の中に流される炭焼太郎を描いた。

Mの母の記録によれば、10ヶ月前に弟の誕生があった。自分より小さい者と遊ぶことと合わせて仲間遊びを好むようになったという。

弟を伴う母とデパートに出かけたMは、はぐれて『迷子の母』を呼び出した、それ以来、2ヶ月に亘り、電車での外出を回避し、激しく抵抗した。

Mの母にとってはその迷子は「わずか5分ほどの間、そこに待っておれなかった」できごとにしすぎなかった。

「カエレルノ?」「Mチャンチトオナジデンシャガトオッテイルノ?」「〇〇(駅名)ニトマルノ?」「スグカエッテクル?」その間、Mは首を振ったり頷いたり。「どうなの、行かないの、ママと〇くんは行きたいの。Mは行きたくないのならお留守番していなさい」というと「イヤ いきたいの」と執拗な問い掛けのくり返しがあったという。

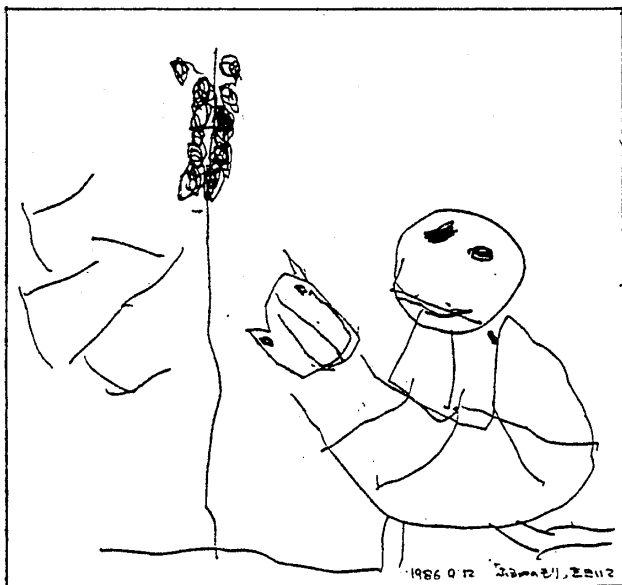
この昔話の主人公は禁じられた桃を食べてしまう、その瞬間、桃は奔流と化し、罰する者を天上界からはるかな地上へと流し去るのである。主人公は地上から天上への旅路はどうか遂げられたが、その天上には永らえることは能わなかった。結果的に、天上から地上へと還されたとも言えるが、愛情の対象である妻との別離は喪失である。

Mにとって住居のすぐ前を通る電車は、往くと必ず目の前に還ってくるという循環の信頼があったに違いない。

しかしMはわずかな約束ごとを破ることで、その円環は欠け、はるかなかなたへ流れ去るものに^{へすげ}変化するのを知ってしまったのだ。目の前の何気なく往還する電車が(確かなものであったものが)、Mを運ぶ時、再び還らぬ不確かなものに変容したのである。

家族(父母)の愛が、かつて確かにMひとりのものであったそれが、赤ん坊(弟)の方へと傾斜していくのを、その不確かなものへと変容していくのを、Mは自らの存在の危うさを感じし、それらが外出時の葛藤を一層重々しくさせた。

外出するMは流されるという受身の立場におかれ、Mは自分の枠を守り他者の誘いを拒否し、防衛的となった。Mの抵抗は2ヶ月で消失したが、それは流されるという受身から能動的に振り向けられる変換があったと考えられる。この昔話の主人公の恐怖と喪失に、Mの世界を重ね合わせて描写し、表現という身体経験を通して補完しえたのである。



描画3 (M・3歳9ヶ月)

描画3『ふるやのもり』(1986.9.12)

この頃、Mは月1回の割合で昔話を描いた。この昔話は笑い話であるが、聞き手の幼い者にとっては、馬小屋の梁の上や藁山の中に潜む馬盗人あるいは狼が、肝が縮むほどに恐れたふるやのもりなるこの世で一番おそろしいばけものが存在するということに恐怖したに違いない。

さらに、雨もりのしたたりが馬盗人の首筋に落ちたその時は、ばけものにとり付かれたと驚く馬盗人になり、はたまたその馬盗人に飛び乗られた狼にもなる。

飛び乗ったのが狼の背中と気付いた馬盗人の恐怖、てっきりばけものにとり付かれたと脅かされ遁走する狼、Mはその両方の姿を描画した。

Mは、狼、馬盗人の双方のふるやのもりへの恐怖という両者の相互性、さらには、乗っている者と乗られている者という両義性を経験するのである。このように昔話は聞手を常に主人公にする。

Mはこの昔話の決定的瞬間、そしてそれは「今のM」を描画したのである。

家庭においてMは、父母からは保護される無力の者とされ、一方、弟へは「姉」として保護する者として位置づけられている。

両者に同時に在ることを位置づけられていることからの抑圧は、Mにこの描画をなさせた。なぜなら、昔話をきくことで、イメージは阻害されることなく能動的思考となるからだ。

Mは一本の垂直な木を画面の中央近くに描いた。この昔話では馬盗人がその木の洞穴の中に身を隠すところであ

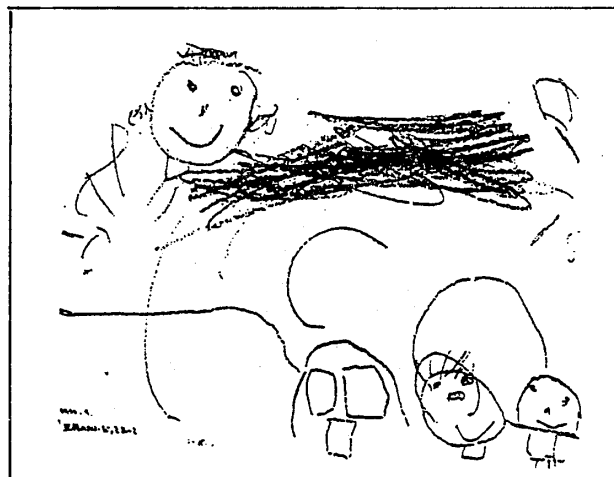
る。

垂直な木を描くMに、抑圧の中から一步踏み出したいと再生の期待がかいま見えるのである。

描画4『三枚のおふだ』(1986.10)

中央に小僧の投げた護符で生じた川が青いクレヨンで色濃く塗り込められ、川の上方に同色のクレヨンの小僧の顔がある。川の下には他の一枚の護符の力で出現した山々、その一つの山の中には三枚の護符が納まっている。山も護符も紫色のクレヨンで描かれているが、さらに下方から上方にやや薄く半円の曲線が伸びる。これは火であろうか。燃えさかる赤い炎の色は用いることなく紫色と青色である。

右下方には山姥に紐で結わえられた小僧も紫色である。



描画4 (M・3歳10ヶ月)

この昔話では山姥は初め小僧を抱寝をするかのようにし、やがて、本性を現わす。正の母性から負のそれへの変化である。

Mは喰い殺す負の母性の呪縛からの脱出を願望したが、この昔話の小僧の持つ守護符を手にしていないのである。

紫色の三枚の護符が画面の下方とはいえ、真正面に据えられていることはMの希求の強さと、それにもかかわらず適えられない不安が表現されている。そして、

紐でくくりつける山姥、即ち負の母性と身代りとなる護符、即ち正の母性とを同時的に存在させていることは、Mには、同時にそれが「今のM」であることを示すものである。さらに言えば、そのいずれもが同一の「母」からもたらされることの恐怖と不安が表出しているともいえる。

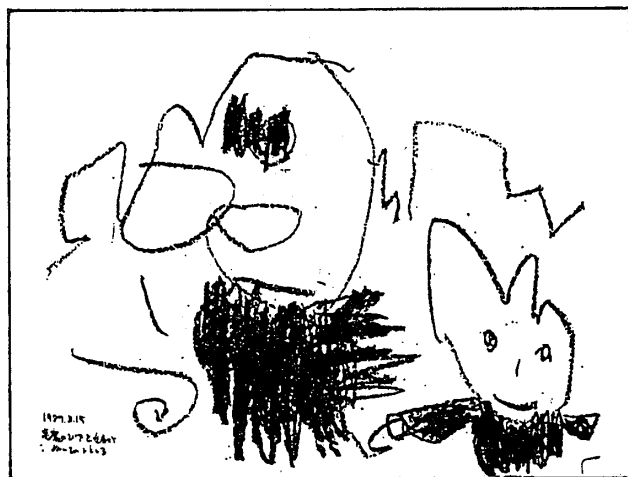
青と紫のクレヨンの色分けは、閉塞の「今のM」と不

安に彩られてはいるが、山や川、火を身のまわりに捲き起し脱出成功を希求する「今のM」を意味するのではないか。

描画5『三本の金髪をもった悪魔』(1987.3.15)

中央に水色のクレヨンで悪魔が大きく描かれ、その目は水色に塗りつぶされ、髭は密に黒くなぐりがきされている。悪魔の右下の女房の青色の顔と腕、胴体は黒色である。女房の上方に既に抜かれた髭が一本と画面左下方にさらに一本、女房の水色の手は悪魔の髭をまさに今引き抜こうと握んでいる。女房はこの三本目の髭にも、悪魔だけが知る難問の答えを聞き出すことも成功する。

Mは「二ホンメノヒゲヲヌイテイルトコロ」と言って描いた。



描画5 (M・4歳3ヶ月)

Mは弟の出現以来のこの一年間、激しい葛藤を体験した。

Mの心性画以外の描画“家族の肖像”3点に触れることで、この昔話の悪魔の髭を抜く女房とMの関りの世界が浮上してくるのではないかと考える。

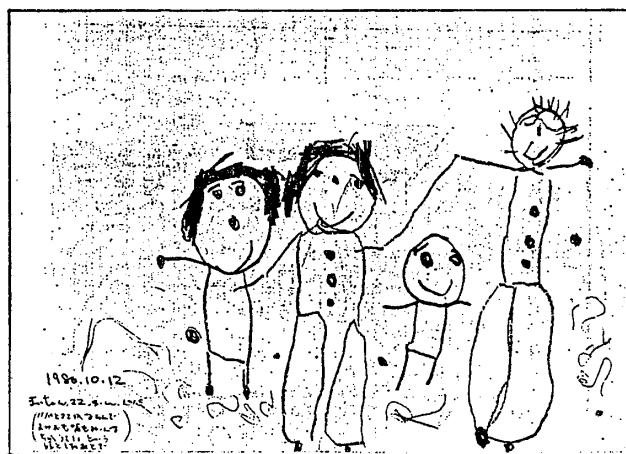
描画aは、中央に父の大きな顔、その下には、左に母、右に弟の二人が密着して並列し、父との三人が、まともになっている。三人の左方に長方形の家具、その上方には肌色のバツタ、右方には大きなドア、そしてドアの右下方に小さくMの顔と胴体がある。ドアの上には黄色の太陽がオレンジ色の光線に包まれている。そして、これら全てを丸みのある横長の長方形で囲って家族が描かれている。

太陽とバツタ以外は全てオレンジ色のクレヨンである。

弟誕生8ヶ月目の描画である。激しいオレンジ色は、まぎれもなく弟への燃えさかる嫉妬と家族からの理不尽



描画a



描画b

な疎外感と憎悪の表出である。

それから5ヶ月後、描画bには、画面中央に母が足首までのパンタロン、母の左側には母よりやや低い背丈のMが、母の右手で繋がっている。画面右には最も背丈高い父が足首までのパンタロン。父母とも3個のボタンをつけ、Mと父母には靴がはかされている。父と母の肩からの腕は切れ目なく連なり、その下に弟がいる。これら全ては、紫色のクレヨンで描かれている。三人の目はクレヨンで埋められているが父のみ空のままである。Mと弟の足元、父の右下方に細い赤のクレヨンで糸屑様の模様。

描画aでは、弟の存在に脅かされ、嫉妬に燃え、ドアの横に身を潜め、家の中に居るにもかかわらず、理不尽なその立場に激しい憤りを持っていた。

それから5ヶ月を経て、Mはドアの横から身を乗り出し、母との関係を回復したかのように繋がりをを見せている。

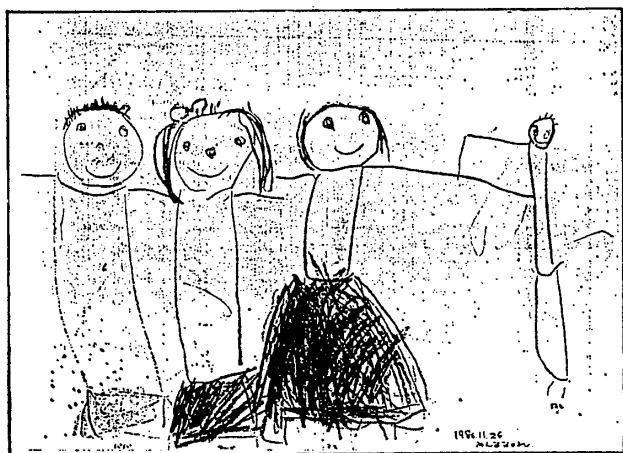
描画aの、Mと父の頭髪は同一のスタイルであったものから、ここでは母と同一であることは、母との同化の願望の強いことを示すものである。

Mは「パバトママガナランデ、オカオモ、セモ、ミンナチガウデシヨ」といって描いた。紫色の描画は、Mのこうありたいのに未だにそうはなれない不安が伝わってくるものである。

父の目が空にあること、母が弟を挟んで父とは離れて描かれていることに、Mは父と母の間の関係のかすかな弱りを察知していた。

子どもは「見えるもの」でなく「知っていること」を描くものであるからだ。

この時、Mは昔話の『三枚のおふだ』を描がいた。山姥（呪縛する母）と未だ手に入れていないおふだ（保護と安全と愛をもたらす存在一母一からの確証）を示す紫色と、描画bの紫色とが、全くの同色であることからMの世界が、一見、非連続的に見えて、その実、切れ目なく連続するまとまりがあることに気づく。



描画c

Mはさらにその1ヶ月後に描画cを表わした。中央に母が、左側にM、その左側にMの父。Mと父は頭部・胴体・腰部まで同じ大きさで形で描かれている。父の頭髮は短く、髭が付けられ、顔の輪郭と目鼻・口・胴体はピンク、腰部は黄色で塗りつぶされている。

母は、頭部・胴体など黒色で、Mよりやや小さく描かれ、裾広がりスカートはMと同じくオレンジで塗られている。髪は簡単に、そして左手は、この画面の右端の弟の胴体に接している。

弟は黒の線描でだれよりも細い身体、小さな頭となり押しやられている。

Mの髪はゆったりと長くリボンがありピンクの顔の輪郭と鮮やかな緑の目鼻口、胴体の右腕は肩の線から父と繋がっている。

M像は四色に彩られ最も巧く描かれており、Mのナルシズムがうかがわれる。

弟の無彩色は、その死さえ思わせる強い排除の願望で

なかったのか。父と同一の形、大きさのMは、特権的に父と同じ次元の位置にいることを気づかせる。

母との同化を願望しながらも適えられないMは、母を独占する弟を排除し、父をわがものにしたかったのである。

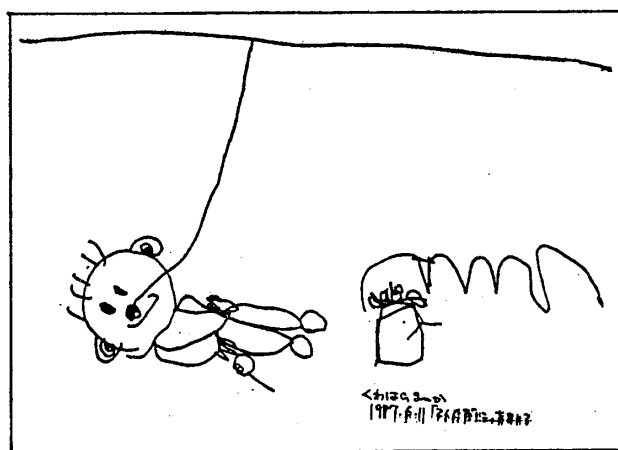
描画a, b, cと6ヶ月間のMの世界は、描画5に連続していくものである。

描画5の中で、Mは父の徴であるところの髭を抜きたいのである。同化できないライバルの母を排除し、父の愛を得るに、三本の髭が必要なのである。この描画において、女房の頭上と悪魔の左下に1本ずつ髭が描かれ、最後の1本を、つまり3本目を抜くところであるが、Mは「悪魔の2本目の髭を抜くところ」と言った。（Mはこの2本と3本の数の錯誤に気づくのに十分な数の概念をもっている）

この昔話においては、悪魔の髭は3本で必要にして十分であり、これをもって主人公は求めるもの全てを手に入れる手がかりとなるのである。

Mが3本目を2本目であるというのは、父の権威の徴であるところの髭の過少評価である。

決定的な3本目を抜こうとしている状況を描きながら、その「決定的な時」に至っていないのではないか、というMの感、不安があるのだ。エディプスコンプレックスの克服にはまだ至っていないのである。



描画6 (M・4歳7ヶ月)

描画6『てんぐだいこ』(1987.6.11)

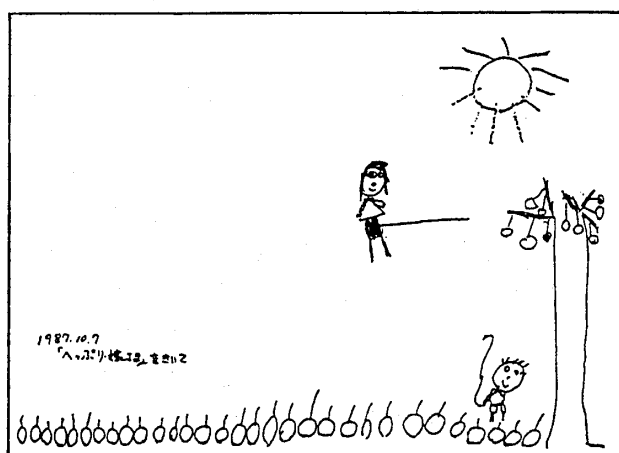
太鼓の音と呪文によって高く伸びた鼻は天界の欄干に結えつけられ、次なる呪文で鼻は縮みはじめ、身体は天界にむかって引きあげられていく。

Mはこの昔話では、天空に浮遊し、天空と鼻の繋がった主人公を描いた。

天空は、それ自体と、その隠しもつすべてのものによって憧憬の象徴とされるが、Mは未だ知らぬどこかに向

って浮遊する自らに不安を持ったのである。

天空は、それは帰還不可の死の観念を伴った不安であったのではないか。



描画7 (M・4歳10ヶ月)

描画7『屁っぶり嫁さま』(1987.10.7)

排泄行為は幼い子どもたちにとって、単に生理的快感の源泉であるだけでなく、それが自らの身体からの未分化のものとして、その両義性から興味尽きぬ対象である。

糞尿に次ぐものとして、腸や胃の中にたまったガス、形ないものとしての排泄では屁、げっぷがあるが、乳児においては授乳の後のそのいずれもが、健やかなものとして、安堵の目安として歓迎されるものである。このことは糞尿を含めて、社会的、心理的に忌避感のない点において同等の位置を占めている。しかし「しつけ」によって、抑圧され、忌避され、分離されていく。決定的忌避としての糞尿に次ぐ屁は、口からのげっぷより、肛門からのガスとして、より糞に近いものとして忌避される。

この昔話の主人公は、その放屁により忌避されたが、華々しい放屁力の逆転が演じられ忌避から解かれ、求められる者となったのである。

Mの描画は、その瞬間である。

主人公の屁力は一直線に描かれ、その強力であることの証明をする梨の実に迫っている。

梨の木の根元には、左方にみごとな梨が、直線的に整列し、主人公の屁を讃え屁力を誇示している。主人公の夫は、何の役にも立たなかった棹をへし曲げ、立ちつくし、屁力に感じ入っている。

画面の右側には梨の木が地面から垂直に立ち、たわわに実をつけている。

Mは忌避の徴である「屁」が、忌避されることなく父に受け入れられたいと願望し、それが適えられたのであ

る。

Mは「放屁」で臆することなく、自我を表出しており、自らの存在の承認を求めているのである。丁寧に並べられた見事な梨の実実はMの「自我」であることに気づくのである。

すっきりと立つ木は、安定してきた「自我」の現れであり、主人公を照す太陽は、Mに光輝と価値を与えている。

4歳10ヶ月のMからは、エディップス葛藤から、さらに1歩踏み出しを窺いみるのである。そして、Mの家庭の中で安らぎと落着きを手に入れる兆、あるいは手に入れたという証を示した描画であると気づかされたのである。

考 察

マックス・リュートナー⁴⁾によれば、「昔話は、現実を象徴するが、伝説は現実的な想像を強いる⁴⁾」という言葉が示すように、昔話は、それ故に、内的現実とたやすく合流するのである。

しかし、語られる昔話のきき手が、それを知的のみの理解、合理的思考のみできくならば、外的現実⁴⁾にこだわり元型的にととのえられた世界への旅の通路は閉ざされるのである。

未だ原始に住む子どもたちは「複合的な時」——同時的、両義性、両性具有的、アンビバレンツ——を生きて、内的外的現実と自在に往還しうる者たちである。

無意識レベルに降りることの能う子どもたちは、昔話を深く聴くことができるのである。

ユングの言うところの無意識の深層心理から語りかけられた子どもは、自らの内的世界に潜む、夢想や不安、願望を、「今の自分」に照合し、選択的に、自らの発した問いかけに対して、自らの中に答を見出していくのである。

Mはこの必然性によって、描画しその中に自らの思考と人格を投影させた。

Mの抑圧体験——恐れ、不安・無力感など——は、描画し、自らの外に翻らせることで、緊張は弛み、抑圧を解き放つ作用があったからこそ、Mは描き続けたのである。

この二重の意味の必然性はここに呈示された描画によって気づくのである。

Mの描画は、その昔話の決定的瞬間と極めて一致性が高い。それは昔話の内容とMの(子どもの)心性とが強く結びつき、描かれたからである。

そしてその描画はMの内的真実と一致するのである。Mの成長の課程で、ユングのいうところの自己実現のある段階を描きだした瞬間でもあるのだ。

それ故、昔話の内容と心性が結びつき、必然性をもって描画されたMのこれらを「心性画」とするのである。

ここでは子どもの描画の分析をする者ではない。あくまで、Mが昔話をきくことで描画したものから、子どもの世界を知る手がかりの模索を試みた。

私はMと共に昔話をきき、かつ、その心性画によりMの世界に直接に触れ、理解を深めることができた。

Mの心性画から、おとなと異質の子どもの世界を発見し、あるがままに受け入れていくことで、子どもはさらに明らかに表現するようになるに違いない。

そしてこの異質なる子どもと共生していく中で、子どもの自らへの問いかけは、おとなに（私に）、人間として、いかに生きるかという問いを逆照射するものである。

(注)

- (1) 『昔話の深層』河合隼雄 福音館書店
- (2) M, 1982.11生, 第1子, 父・教員, 母・教員資格所有。
- (3) 毎週開催される家庭文庫（かっこう文庫・筆者主宰）において、毎週昔話を二話、10名から14, 5名の子どもたちときいた。
- (4) 1909年, スイス生。「ヨーロッパの昔話—形式と本質」など昔話の著書多数, チューリッヒ大教授。

(参考文献)

- (1) 『昔話の本質』マックス・リュートイ 福音館書店 1974
- (2) 『昔話の解釈』マックス・リュートイ 福音館書店 1982
- (3) 『ピアジェ』M・Aボーデン 岩波書店 1980
- (4) 『イメージの誕生』中沢和子 NHKブックス
- (5) 『子どもは絵で語る』ロズリーヌ・ダヴィド 紀伊国屋書店
- (6) 『＜子供＞の誕生』フィリップ・アリエス みすず書房 1980
- (7) 『ユング心理学入門』河合隼雄 培風館 1967
- (8) 『昔話の魔力』ブルーノ・ベッテルハイム 評論社

昔話概略1

ねずみのすもう (M・2歳8ヶ月)
——日本昔話大成 笑話新話型26

鼠の相撲 (cf. AT 112)

爺が山で、庄屋の家の太った鼠と、自分の家の瘦せた鼠が相撲をとっているのを見る。自分の家の鼠が負けてばかりいるので、餅を搗いて食わせる。やせた鼠が勝つようになったので太った鼠が理由をきく。やめた鼠は、爺が搗いてくれた餅のおかげだが、貧乏なのでたくさん搗けないという。爺がこれを聞いて二匹分の餅を搗いてやる。庄屋の鼠はよろこんで、家から銭を持ち出してやる。

2

炭焼き太郎 (偕成社『宮城の民話』より) (M・3歳7ヶ月)

——日本昔話大成・118天人女房 (AT 400)

貧しい男が天女と夫婦になるが、女は天に帰り、男は妻を慕って天に行く。妻の父親から三つの課題を出され、成し遂げる。しかし、天界の約束ごと、「天界の桃を食してはならない」という禁を破り、桃の川に流され妻との別離となる。年一度の逢瀬のみとなる。たなばたの由来。

3

ふるやのもり (M・3歳9ヶ月)

——日本昔話大成 33B 古屋の漏 (AT 177)

雨の降る夜、爺婆が虎狼 (借金取り) よりも古屋の漏が怖いと語っている。爺婆を食いに來た虎狼がこれを知り、自分より怖いものがあるのかと思って逃げる。馬盗人は、虎狼を馬だと思って飛び乗る。虎狼は古屋の漏に捕まえられたと思って振り落とす。馬盗人は虎狼であることを知って穴の中に逃げる。狼は仲間に告げる。狼が確かめようとして尻尾を穴の中に入れて馬盗人に切られる。狼の尻尾の短くなったわけ。

4

三枚のおふだ (表・3歳10ヶ月)

——日本昔話大成 2403枚の護符 (cf 313)

小僧が山姥の家に泊る。山姥が腰に結びつけた縄を護符にとりかえる。三枚の護符を投げて川、山、(火)を作って逃げる。山姥は火で焼け死ぬ。または寺まで逃げ帰り、和尚に救を求める。和尚は山姥と化け比べをして豆に化けさせて山姥を食い、小僧を救う。

5

3本の金髪をもった悪魔 (M・4歳3ヶ月)

——『完訳グリム童話』ぎょうせい

王女を妻にすると予言された男の子がそれを恐れた王から迫害されるが予言通りになる。王は、悪魔の三本の金髪を取ってくることを命ずる。男の子はその旅に出て道中、門番から、又、別の門番から、又、わたし守りから難問の救済を求められる。

悪魔の女房の助けで、3本の金髪と難問を解いたお礼の黄金をも得て、めでたく末は王となる。

6

尻っぶり嫁さま（講談社『日本の昔ばなし』）

——日本昔話大成 377尻ひり嫁（cf. AT 1450）

嫁が姑を尻で吹き飛ばして離縁される。夫が嫁を里へ返しに行く道中、嫁の尻は梨を吹き落した。夫はこんないい嫁はないと再び連れ帰る。